

# 特殊教育に対する教師の意識調査

鈴木 健治\*・権藤 祐子\*\*

## A Survey of the Attitudes of Teachers toward Special Education

Kenji SUZUMURA\* and Yuko GONDO\*\*

### SUMMARY

The results of a survey of the attitudes of teachers toward Special Education were positive on the whole. The teachers, however, displayed negative attitudes as individuals. Significant differences were found owing to teaching experience, but no difference was found to arise from sex, elementary school or junior high school, experience with Special Education, and the existence of Special Education classes. The determining factors were the teacher's bifacial awareness—the differences between real intentions and behaviors—in terms of personal or social position and the difference in their experiences other than with Special Education.

### はじめに

昭和54年の特殊教育義務化に伴い、特殊学校・学級の増設がなされてきたが、免許法による養護学校、盲・聾学校教諭普通免許を持っている教師の数は少なく、専門的知識を持たない者が、特殊教育に携わっている傾向にある。また、行政的には義務化されたとはいえ、特殊教育に対し今だに偏見や誤解を持っている者もあり、実際の教育の場において様々な問題が指摘されている。交流教育も盛んになり、必ずしも特殊学級担当の教師だけが、特殊教育にかかわるわけではなくなってきた。そのような現状の中で、教育の第一線で活躍している教師の特殊教育に対する見解を明らかにすることは、これから発展していく状態にある特殊教育そのものの問題性を新たな視点から見つめ直すことになるであろうし、広く教育全体にわたる現状が明らかにされるものと思う。教育について語るには、様々な変数がかかわってくるが、その中でも教師の属性は大きいものと考えられる。そこで今回は、小・中学校の教師を対象にアンケート調査を行い、その特殊教育に対する意識が肯定的か、否定的かで分析し、その要因を調べることにした。

\* 特殊教育教室 (Dept. of Special Education)

\*\* 大学院研究生 (Research Student in Graduate Course)

## 方 法

神奈川県内の公立小学校及び中学校の教師80名を対象としてアンケート調査を行った。

**調査内容** アンケートの項目は、広範囲にわたり設問しているが、はじめに触れたように、特殊教育に対し肯定的意識を持つか、否定的であるかということが意図されている。

アンケート調査項目

- 1 特殊学級とは、どのような子供のための学級だと思いますか。  
( )
- 2 特殊学級について、どのようなイメージを持っていますか。あてはまる番号のすべてに○をつけて下さい。
  - (1) 暗い感じがする。
  - (2) 明るい感じがする。
  - (3) 気持ちが悪い。
  - (4) 和気あいあいとしていて楽しそう。
  - (5) 自分とは別世界のように感じる。
  - (6) 皆、一生懸命やっている感じ。
  - (7) 幼稚園や保育園と同じようなことをしているように感じる。
  - (8) 同じ学校内にあっても普通学級から孤立しているように感じる。
  - (9) 特殊学級担任の教師は、普通学級の子供から他の教師と異なった受けとめられ方をしているように感じる。
  - (10) 特別なイメージはない。
  - (11) その他 ( )
- 3 知恵遅れの子供とは、どのような子供か具体的に説明して下さい。  
( )
- 4 知恵遅れの子供をどう思われますか。あてはまる番号のすべてに○をつけて下さい。
  - (1) 気持ちが悪い。
  - (2) 怖い。恐しい。
  - (3) 別に何とも思わない。
  - (4) 同じ人間だと思う。
  - (5) かわいそうだと思う。
  - (6) かわいらしい。
  - (7) その他 ( )
- 5 貴校には、特殊学級があった方がよいですか。  
(あった方がよい    ない方がよい    どちらとも言えない)
- 6 特殊学級を受け持てみたいと思いますか。
  - (1) 絶対に、受け持ちたい。

- (2) 機会があれば受け持ちたい。  
 (3) 何となく受け持ってもよい気がする。  
 (4) 受け持ちたくないが、やれと言われればやる。  
 (5) 絶対に、受け持ちたくない。  
 (6) その他 ( )  
       理由 ( )
- 7 学校に特殊学級があるのとないのとでは、ある方が普通児の人間形成にとって教育的、社会的にプラスになると感じますか。  
 (1)大変思う (2)やや思う (3)どちらでもない (4)余り思わない (5)全く思わない
- 8 養護学校へ行くよりも、特殊学級へ行った方が障害児の人間形成にとって、教育的、社会的にプラスになると感じますか。  
 (1)大変思う (2)やや思う (3)どちらでもない (4)余り思わない (5)全く思わない
- 9 大学教育において小・中学校の免許状を取得しようとする学生にはすべて「特殊教育概論」(2単位)程度の授業科目を必修にすべきだと思いますか。  
 (1)大変思う (2)やや思う (3)どちらでもない (4)余り思わない (5)全く思わない
- 10 もし特殊学級の担任であったら、社会生活の場で特殊学級の担任であることを口にするとき、内心抵抗を感じると感じますか。  
 (1)大変思う (2)やや思う (3)どちらでもない (4)余り思わない (5)全く思わない
- 11 もしも自分の子供が、普通学級か特殊学級かという境界にいる状態であったならば、将来のことを考えて普通学級に在籍させると感じますか。  
 (1)大変思う (2)やや思う (3)どちらでもない (4)余り思わない (5)全く思わない
- 12 自分の子供は、特殊学級のある小学校とない小学校では、ある小学校に通わせたいと感じますか。  
 (1)大変思う (2)やや思う (3)どちらでもない (4)余り思わない (5)全く思わない
- 13 普通学級の子供達に、教師が障害児についての話をしたり、一諸に話し合ったりすることが必要だと思いますか。  
 (1)大変思う (2)やや思う (3)どちらでもない (4)余り思わない (5)全く思わない

**評価方法** アンケートの各回答の結果を、肯定、中庸、否定の3段階を基準とし、順に3点、2点、1点と点数化した。問1と問3では、正答を3点、誤答を1点とし、問2では、(1)、(3)、(5)、(7)、(8)、(9)を1点、(10)を2点、(2)、(4)、(6)を3点とした。問4では、(1)と(2)を1点、(3)を2点、(4)、(5)、(6)を3点とした。問5は「あった方がよい」を3点、「ない方がよい」を1点、「どちらともいえない」を2点とした。問6では、(1)と(2)を3点、(3)を2点、(4)と(5)を1点とした。問7以後は、設問では5段階に分かれているが、これも評価の方法は前述の通りである。問7、8、9、12、13では、(1)と(2)を3点、(3)を2点、(4)と(5)を1点とし、問10を問11では、(1)と(2)を1点、(3)を2点、(4)と(5)を3点とした。なお、問2、4、6のように該当する項目を複数解答可能な設問に関しては、その項目内で解答された組み合わせと全体的傾向から判断し点数化した。

次に示す1～5表は、各条件別による内分けである。

	人数
男	40
女	40
計	80

	人数
小学校	40
中学校	40
計	80

	人数
有	37
無	43
計	80

表 4 特殊教育経験

	人数
有	28
無	44
不明	8
計	80

表 5 教職経験年数

	人数
0～5年	20
6～10年	12
11～20年	17
21～30年	12
31年以上	11
不明	8
計	80

## 結 果

特殊学級及び障害児に焦点をあて、特殊教育に対する教師の意識を肯定的か否定的かで分析すると、全体では、CR (Critical Ratio) のノンパラメトリック法を用い検定したところ、1%水準以上で肯定的傾向がみられた。各設問ごとにみると問1, 3, 4, 5, 7, 8, 9, 10, 12, 13で肯定的、問6と問11で否定的となり、問2では肯定派と否定派が同程度のため相殺され有意差がなかった。(表6)

表 6 各目ごとの臨界比 (Critical Ratio)

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	計
肯定度数	62	38	47	63	47	20	52	44	66	55	18	36	58	606
否定度数	8	37	4	8	9	44	6	7	5	12	33	12	5	190
n	70	75	51	71	56	64	58	51	71	67	51	48	63	796
CR	6.454	0.115	6.021	6.527	5.078	3.000	6.040	5.181	7.239	5.253	2.100	3.464	6.677	14.745

\* P<.05 \*\* P<.01

次に各条件内(表1～5)で検討してみると、性別(男・女)、学校種別(小学校・中学校)、特殊学級設置状況別(有・無)、特殊教育経験別(有・無)では、いずれも有無な差はなかったが、表7からわかるように、教職経験年数別(0～5年, 6～10年, 11～20年,

21～30年, 31年以上) では, 6～10年と31年以上のグループにおいて,  $t=4.360$ ,  $df=21$ ,  $P<.001$  で有意差がみられ, 11～20年と31年以上の間では,  $t=2.719$ ,  $df=26$ ,  $P<.02$ , そして21～30年と31年以上でも  $t=2.891$ ,  $df=21$ ,  $P<.01$  という有意な差があった。(表7)

表7 教職経験年数の差による特殊教育への意識の差 (t 検定)

	I	II	III	IV	V	
I		—	—	—	—	
II			—	—	4.360***	* P<.02
III				—	2.719*	** P<.01
IV					2.891**	*** P<.001
V						

教職経験年数  
 I : 0～5年  
 II : 6～10年  
 III : 11～20年  
 IV : 21～30年  
 V : 31年以上

次に, 上記3つの差のあった組み合わせで, その差となった要因項目を探るため検定を行ったところ, 6～10年と31年以上の間では問10で  $t=2.202$ ,  $df=21$ ,  $P<.05$ , 問11では  $t=2.220$ ,  $df=21$ ,  $P<.05$  という有意差がそれぞれ見られた。11～20年と31年以上の場合は, 問10でのみ  $t=2.773$ ,  $df=26$ ,  $P<.02$  という有意差があった。そして21～30年と31年以上とでは, 問10で  $t=2.657$ ,  $df=21$ ,  $P<.02$ , 問11で  $t=2.633$ ,  $df=21$ ,  $P<.02$  という有意差があった。

表8 教職経験に基づく各項目ごとの差 (t 検定)

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
6～10年×31年以上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.202**	2.220**	—	—
11～20年×31年以上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.773*	—	—	—
21～30年×31年以上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.657*	2.633*	—	—

\* P<.02 P<.05

### 考 察

これまで, 小学生の障害児への意識調査 (関, 他, 1984), 中学生の障害児への意識調査 (権藤, 他, 1984), 大学生の特殊教育に対する意識調査 (鈴木, 1983) と行われてきたが, ここで実際の教育の場面で活躍し, 特殊教育と能動的なかかわりを持つ立場にある教師の意識を知ることが, 特殊教育のみならず, 教育全般にとっても欠かせないことと思われる。そこで本調査では肯定的意識, 否定的意識という基準に絞って調べてみた。その結果, 全体的には肯定的意識を持っていることがわかった。これを項目ごとにみると知識に関しては, 問1と問3から, かなり正確な知識を持っていることが伺える。特殊学級に関しては80名中8名, 障害児については80人中4名が誤答ただけで, いずれも有意に正しいこ

とがわかる。回答された内容は、精神薄弱児及び肢体不自由児教育についてのみ触れており、他の障害に関して述べている者はほとんどいなかった。これは実際には、精神薄弱児のための特殊学級が一番多く、次いで肢体不自由児学級となり、現実接する機会の多いものが特殊学級ということばに対する固定的イメージとなっているものと推測される。

問2では特殊学級への印象を調べたが、これは肯定、否定と半々に分かれており、どちらとも判断が難しい所である。肯定とした場合の回答をみると、明るい、皆一生懸命やっている感じがすると答えるパターンが目立ち、教育的視野に立った印象で捉えていることがわかる。一方否定的な回答は、自分とは別世界のように感じる。幼稚園や保育園と同じようなことをやっているように感じる。というものが多く、自分個人を中心とした捉え方をしており、教師という教育的立場でみるか、個人的視野でみるかにより生じた結果と思われる。

問3は、精神薄弱児への印象についての設問であるが、かわいい、かわいそうという意識が多く肯定的傾向にあった。これは同次元的な同情の意識が、他次元の立場からみた卑下した見方とも考えられるが、生徒に対する教師の情という立場で捉えれば肯定的な意味合いからくるものと解した方がよいように思われる。

問5と問6で実際の場面を想定し、特殊学級への意識を調べてみたが、問5では特殊学級が自分の学校にあった方がよいという肯定的意見であったのに対し、問6での特殊学級担任を希望するかどうかという設問に対し、否定的傾向を示していた。その回答としては大半が、受け持ちたくないがやれと言われればやる。というものであった。そして、その理由として、障害児指導法の知識がないので自信がない、性格・体力的に適していない、仕事なのでやる、というものが主だった。どれも本音としては担当したくないが建前として知識のなさや不適応という理由をあげており、仕事という社会的責任から受け負うという見解であった。問3、問4の結果では、概論的知識はかなり持っていたことから、その矛盾が指摘されよう。ただ、ここで自分の知識への実践的自信は現実に低いことが、問9から伺える。大学教育での特殊教育の扱い方として大半が必修制を望んでおり、その充実した知識の必要性を説いているように思われる。

問7, 8, 13では、交流教育の本質について設問したが、いずれも肯定的意識を持ち、教育的理解の深さを示していた。

問10, 11, 12では、教師という立場を離れ、個人的立場、特に親という立場に立った時の意識を調べてみたが、問11でのみ否定的傾向にあった。親の立場になると普通級に通わせることを希望するのは、偏見や社会的体裁といったもののためであろうが、実際に特殊教育と接する機会も多く、その問題性も目につくことが多いためと解釈したい。

全体を通し、教師という社会的立場にある場合には肯定的見解にあるが、個人的立場にたつと否定的傾向になり、また同次元、他次元でも見解が異なり、アンケート調査における二面性の矛盾を十分考慮せねばならないことが伺える。そして先の中中学生を対象とした時の結果と同じく、本音と建前の関係がみられ、基本的姿勢は教師という立場にあっても変わらないことが示唆された。

次に条件別で検討すると、教職経験年数別の条件下で有意な差があった。経験年数31年

以上というベテラン教師と他の6～30年という中堅層のグループとの間でそれぞれ差があった。教師としてはまだ経験の浅い0～5年のグループとベテラングループの間に差がみられなかったところは興味深いところである。これは0～5年グループでは、20名中わずか4名しか特殊教育の経験がなく、未経験の世界への受け入れ体制が確立されていない場合と11名中5名という約半数が特殊教育を経験しており、長い教職生活の中で何らかのかかわりを持ち、その実際の経験から否定的傾向になった場合の一致と思われる。

ベテラン教師と中堅教師の間に差があった原因を追究するため、各項目間での関係をみると、問10と問11で差がみられ要因となっていることが伺えた。問10では、特殊学級担任であることを社会生活の場で口にする事への抵抗感を問うもので、中堅グループは、ほとんど抵抗はないという肯定的なものであったが、ベテラングループはかなり抵抗を持っていた。

なぜ他の条件では差のないものが、教職経験年数という条件下でのみ差を示し、しかも、経験年数30年以上だけが特異な傾向にあるのであろうか、経験年数は、生活年齢にほぼ一致するはずである。ある意味では世代間の差という推察も成立するであろう。50代と他の年齢層を分ける大きな経験的要因として、第二次世界大戦があげられる。戦前派、戦後派の物の見方の違いが反映されたとも解されよう。歴史的にみて、戦前は特殊学級があったが、現在50代の人達が教育された戦時中は特殊学級は廃止され、障害児は放置されたが、教育を受けても特に配慮されない状態であった。そのような時期に教育を受けたものの見方と戦後特殊教育が次第に重きをなしてきた時代に教育を受けたものでは当然、その見解に差が生じると思われる。すなわち、先の小・中学生の意識調査から、小学生から中学生への移行期に基本的見解が形成されると示唆されたが、時期的に、50代の教師が戦時中にこの大切な年代であったことが伺われ、その年代での適切な教育の重要性が改めて示された。

## 要 約

特殊教育に対し、肯定的意識を持っているか、否定的意識を持っているか小・中学校の教師を対象にアンケート調査を行ったところ、全体としては肯定的であった。13項目中10項目が肯定的で、2項目が否定的で、1項目がどちらでもなかった。その要因は、社会的立場、個人的立場という立場の違いによるものであった。

また教職経験年数による差がみられ、31年以上のベテラン教師に特異な否定的傾向がみられた。この要因は歴史的な第二次世界大戦をはさむ特殊教育の流れがあげられ、障害児に対する基本的見解の成立する時期との関連が示唆された。

## 引用文献

- 1) 権藤祐子, 関三根代, 鈴木健治(1984): 精神薄弱児に対する普通児のかかわり方——中学生の場合——, 日本特殊教育学会第22回大会報告 (日本特殊教育学会第22回大会発表論文集, 236-237).
- 2) 鈴木健治(1983): 特殊教育に対する大学生の意識, 横浜国立大学教育紀要, **23**, 147-156.
- 3) 関三根代, 権藤祐子, 鈴木健治(1984): 精神薄弱児に対する普通児のかかわり方——小学生の場合——, 日本特殊教育学会第22回大会報告 (日本特殊教育学会第22回大会発表論文集, 234-235).